

式部久先生に聞く、 設立当初の総合科学部

混乱の中からの 誕生一。



式部久先生のプロフィール
学部長在任期間 S52.8.31～S57.3.31
専門領域 西洋古典思想・倫理学

総合科学部設立の経緯

総合科学部は、昭和43・44年をピークとする全国的な学園紛争の中から生まれました。広大では、44年2月11日教養部学友会が無期限ストに突入し、続いて建物を封鎖して研究・教育をストップさせるに至ります。事態を重く見た教養部は直ちに独自の改革委員会を発足させて、いわゆる大学問題に取り組みました。その結果、自主改革の道として得られたのが、総合科学部の創設という画期的な案だったのです。教官会を挙げての連日連夜の会議の結論でした。

新制大学では、教養教育の重要性が強調され、^(注1)そのためのものとして前期二年の教養課程が設けられるとともに、その担当部局として教養部が設けられていました。しかし、教養部は「学部」以前の半人前でしかなく、例えば広大では130人の教官で2千人の学生の教育に当たる有様でした。授業の多くがマスタプロとなり、紛争のほとんどが教養部を震源地とするのも無理からぬところでした。これは、全国の大学の共通の悩みでした。

退くべきか進むべきか。この岐路に立つて前に進む道を選んだのが総合科学部設立の案でした。新設されるべき総合科学部においては、学部4年の課程を通じて高度の教養教育

を行うと同時に、責任部局として、その成果を全学の教養教育に生かすべきものとされました。総合科学部案が固まってから実現されるまでの過程についても書くべきことは沢山ありますが、文部省の強力なバックアップや学内他学部の反応など、今回は割愛しましょう。ちなみに、総合科学部の名称は、新学部の教育・研究の理念は学際的・総合的知見・思考にあるということから選ばれたものです。なお、一学科制・大講座制は学部・学科の壁を破る趣旨で大学改革の一環として採用されたものです。

設立当初の総合科学部・総科生の雰囲気

47年6月7日、総合科学部発足と同時に「教養部」の看板を外し、「総合科学部」のそれを掲げました。先生方の期待に満ちた顔が浮かび上がります。しかし、学生諸君にとってはマイホームの感覚はなかったでしょう。学部固有の建物は西条への統合移転まで待たされ、僅かに一コース一研究室が工面できただけでした。そのうちにJIRの貨車の払い下げを受け、研究室に改装したところ、意外に好評だったのが印象的でした。^(注2)

総合科学部第一回の卒業式

待望の一期生の卒業に当たっては、市内の体育館での全学の卒業式の後で、千田町キャンパスに戻って学部独自の卒業式を行いました。女子学生の振袖姿があり、男子生徒のスーツ姿があり、加えて親御さん方の参加ありで、華やかな一瞬です。「設立して間もなく万事不如意の中をよく頑張ってくれました」と祝辞を述べた記憶があります。就職試験では学部の説明に苦勞した学生も多かったと聞きます。

当時抱えていた問題点

一期生を送り出して一応新学部は完成したといっても、その実多くの問題点を抱えての見切り発車に近いものでした。

まず、教官陣容を整えるという仕事がありました。60名を超える新規教員の割り当てを4年間でこなさなければなりません。「良い研究者」の情報を求めて全国を飛び回りました。教官陣容でいえば、外国語講座と保健体育講座が4コースの外に置かれたことも「学部内格差」を起こしかねないことでした。カリキュラムも大きな問題でした。学際的・広域的教育という大きな理念の展開として、先生方の目はどうしても必修指定に傾きがちに

なります。もともと総合科学部の発想には学生により自由で自主的な選択をとという原理があったのですが、いつの間にか忘れ去られ負担過重となるのでした。始めのうちは毎年のようにカリキュラムの改変を余儀なくされたものでした。

入学時点で専攻を決めないというコース制の利点も、学生に志望の片寄りがあれば効力は半減します。一度など十数名の学生が申し立て書を手に学部長室に直談判に来たことがあります。コース定員に上限を置くのは不当当というのです。自由と制約の兼ね合いの難しいところですね。

大学院博士課程の構築は、最大の課題だったと言えるでしょう。日夜頭を悩ませました。だが、この話も他日にゆずりましょう。

現在の学生に一言

「僕の前に道はなく、僕の後ろに道が出来る」総合科学部は創設以来、先例のない道を突っ走ってきました。皆さんもどうか新しい道を切り開く意気込みで、夢と希望をもってがんばってください。よい伝統を残すようお願いいたします。

(この文章は、式部先生に依頼し、書いていただいたものです。)



▲JR貨車の研究室

- 注1 戦後、学校教育法に基づいて設定された四年制大学。
- 注2 分散したキャンパスを一つにまとめるので統合移転と呼んだ。公式名称。

天野先生に聞く、 設立10年頃の総合科学部

統合移転に向けて—。
初心忘るべからず。



天野實先生のプロフィール
学部長在任期間 S62.7.22~H4.3.31
専門領域 発生生物学・細胞生物学

総合科学部設立当時

私が、総合科学部に赴任してきたのは、学部が設立されて2年が経つ頃でした。それまでは、国立がんセンターで研究をしていました。赴任してきた理由としては、初代学部長であった今堀先生の新しい「総合科学部」の理念に非常に共鳴する点があったからです。私は、それまでにも、様々なところを転々としてきて、他の分野の人と交流することが大切だということは身にしみて感じていました。また、自分の専門分野である生物学を研究していても、それに隣接する生化学、エコロジなどについても必要だと感じ、独学で学んでいたのです。ですから、総合科学部の理念である総合性という点に強く惹かれました。当時は、情報科学コースに所属していたのですが、数学、生物の遺伝情報、そして心理学など異なる分野の先生方が集まって、みんなが学際的な研究を目指して張り切って研究していましたね。学生の方も、元気のよい人たちが集まり、頑張っていたと思います。

ただ、設立当初キャンパスがあった東千田は研究環境としては、非常に悪かったです。当時言われていた言葉としては、「研究室の質と量を、研究室の面積で割ったらギネスブックにのるだろう」と言われていたくらい狭

かったのです。私は、大学でもガンの研究がしたかったのですが、ねずみを飼うためのスペースがなく、結局、以前研究していたカエルに変更せざるを得ませんでした。先生方の研究室の代わりとしてプレハブ小屋や貨車を使用していましたね。学生の方も、勉強するスペースがなく、早番と遅番の二回に分けて来てもらっていましたね。

設立十年目での問題

僕が、学部長として就任する前は、岡本哲彦先生（在任期間S57~S62）が学部長をなさってたんですよ。先生は、カリキュラムの改革を熱心になさっていました。総合科学部が設立した当初は、4つのコースしかなく、外国語、体育関係の先生はどのコースにも入っていませんでした。四年生特別研究の学生を持つことができなかったのです。外国語や体育の先生たちも、学生を持てるようになり、大学院の授業も担当できるようになりました。大学院の授業も担当できるようになりました。しかし、そんな中で、岡本先生が殺されるという事件が起こったのです。私は、事務取扱、その後学部長となるのですが、当時は、裁判やマスコミへの対応などといった事件の後処理に追われました。事件の背後には、人事をめぐる問題が

あったとマスコミには取り上げられました。しかし、その当時、私たちは総合科学部の人は日本で最もフェアであると自負していたんです。それだけに、非常に悲しく、残念な事件でした。そして、苦しい二、三年でした。

事件が落ち着いた後は、学内での過激派の学生運動への対応などに迫られました。特に大きかったのは、統合移転問題でした。私が総合科学部に赴任してくる前から、東千田キャンパスから西条キャンパスへの移転は決まっていたのですが、計画は思うように進みませんでした。工学部が昭和57年に移転してから、十年経っても総合科学部は移転することができず、残念ながら、私は新しいキャンパスで、新しい研究室の椅子に座ることなく定年退職を迎えることになったのです。

揺れ動き続ける総合科学部

私が就任してきた時から、おそらく現在に至るまで、総合科学部は揺れに揺れて、動きに動いて、落ち着いてないという状態にあると思います。それは、教官にしても学生にしてもです。教官は、他学部よりも多くの授業を担当しなくてはなりません。研究も狭い面積の中で行わなければなりません。途中で投げ出した先生方も数多くいま

す。しかし、学部の理念に沿った、総合科学的な研究プロジェクトは、実際に進められ高い評価も得ています。

また、学生は常に総合科学とは何かという不安にさいなまれ続けてきたのではないかと思います。しかし、卒業生の活躍ぶりは目を見張るものがあります。国際舞台で活躍する人、マスコミで活躍する人と様々です。総合科学部で悩み悩んで、苦しみ続けた経験が、社会で生きているのだと思います。「この学部に来てよかったですか」というアンケートを全学的に行ったところ、一番多かったのは、総合科学部だったのです。

学生にひとこと

総合科学部は、幅広く学ぶということ、結局専門性が身につかず終わってしまうのではないかと不安に思われているかたもいるかもしれません。しかし、高い山というのは、裾野が広いものでしょう。高い山を作るには、必ず、広い裾野が必要なのです。だから、総合科学部の学生は他の学部の学生よりも倍以上勉強しなくてはならないと思います。また、総合科学部という学部は、教官も含め、変わり者で面白い人が多い学部です。若い時に、変わり者、自分とは違った専門分野に興味がある

友達を作ることは一生涯の宝です。この総合科学部のメリットを最大限に生かしてください。また、早いうちから多くの先生の研究室に遊びに行ってください。

最後にお願したいのは、学生同士の縦のつながりを作ってほしいということです。自分から、縦のつながりを作って、総合科学部を盛り上げていって下さい。また、コンパで総科の歌を歌いましょう。

「広大総科は世界に一つ。世界にはばだけ総科生。」

(担当 14生 筒井志歩)



渡部先生に聞く、 設立20年頃の総合科学部

総合と専門の 両立の難しさ



渡部三雄先生のプロフィール
学部長在任期間 H6.4.1～H8.3.31
専門領域 統計物理学
現職 広島国際大学教授

西条への移転

私が学部長に就いたのは、平成5年のことです。その前年に総合科学部は東千田キャンパスから西条に移転してきました。当時の西条の様子についてお話する前に、まず東千田の状況についてお話ししたいと思います。東千田キャンパスは、もしかしたら他の先生からお聞きになったかもしれませんが、施設・設備面で非常に悪条件であったのです。面積が狭く、総合科学部の先生は十分な研究スペースを得ることができない状態でした。廊下にもまだ実験装置が置かれており、人が通ることもしかない状態だったのですよ。プレハブや貨車を利用した研究室さえありました。そのような状態でしたから、西条に移転してきたことで、施設・設備面では総合科学部の長年の夢がかなった時期だったと言えます。おそらく、特に実験関係の先生は、東千田キャンパスには二度と帰りたくないと思ったでしょうね。

ただ、移転してきた西条も完全に整備されたという段階ではありませんでした。私の知り合いが、西条駅に降り立ったとき、「本当に、こんなところに広島大学はあるのか」と言ったくらいですから。当時は、ブルーバールはありませんでした。あの辺りは、まだ山

でした。それから、大学周辺や学内の道路も舗装されていないという状況だったので、雨が降ると土がどろどろになり、学生も教官も長靴を絶対履いてきていましたね。私も西条に移ってくる時に長靴を購入しました。建物に入るときは、長靴を脱いで上履きに履きかえていました。そういえば、あの当時は、スペイン広場や西2の食堂ありませんでしたね。

当時抱えていた問題

施設・設備というハード面の整備ができ移転が一段落すると、研究・教育というソフト面の充実が再び課題として注目されました。

総合科学部は、一学部一学科という理念のもとスタートしたわけですが、時間を経るごとに、コースが学科のような役割を担うようになってきたのです。設立当初は、教官も学生も、分野の壁を越えて研究しようという姿勢の人が多く見られました。しかし、その内コースに閉じこもってしまうような傾向がでてきたのも事実でした。これでは、総合科学部は他の学部と同じになってしまうという危機感がありました。

総合科学部は、従来の学問では解決しきれないような様々な現代社会の課題を、別々の

分野を融合することによって解決しようというものが目標であったのです。他の学部のような既存の学問領域に分けないことで、フレキシブルに新しい問題に対応できるというのが、総科の良さであるはずでした。

しかし、これは非常に難しい問題でした。特に学生の教育面においてです。ただ広く学んだだけの浅い知識では学際性・総合性など語れないということで、コースの専門性を高めて、学生に自分の核となる専門を身につけさせようとする、コース間の壁を作り出し、てしまう。この広い視野をもたせる教育と専門教育の両立は、移転当時を含め、学部設立以来の最大の課題であったと言えるでしょう。この課題を克服すべく、移転以前からコースの改編が行われてきましたが、現在は、さらにコース制からプログラム制に移っていますね。

時代の変化に応じて新しい課題が生まれるわけですから、新しい学問のパラダイムを求めて絶えず変革して行かなくてはいけない。これは総合科学部の宿命でしょうね。

悩み続けた総合科学部生

総合科学部が設立されてから、この新しい学部に入學してくる学生たちは、常に自分の

学部について悩んできたのではないかと思えます。この三十年は、総合科学部とは何かについて、先生方はもちろん学生たちも悩み続けてきた三十年間だったと言えるでしょう。

私は、総合科学の定義はいろいろあっていると思っています。定義に悩むのも意味はあるでしょうが、その人なりの「総合科学」を見つけて実践することが重要です。ただ、少なくとも、総合科学の研究を目指す限り、他の分野への関心・好奇心だけは忘れるべきではないと思います。自分の専門的な分野を持ちながらも、課題の解決に必要ななら専門とは違う分野へも勉強の幅を広げて行く。そういう姿勢が総合科学部生には必要だと思えます。

学生へのメッセージ

広い視野を持つということは、ただ、だからと色々なことを学ぶという意味ではないということを入れておいてください。そして、広い視野を持つ大前提として、まず様々な事象に対する好奇心を忘れないようにしてください。また、なんども繰り返すことになりませんが、自分の核となる専門分野をしっかりと身につけることが重要です。ある課題の解決に向って様々な分野からのアプローチ

が必要なとき、この分野からならば、自分は胸を張って攻めることができるというものを持つてください。総合科学部生は、他の学部に比べて、より大変であるということを認識しましょう。今は、具体的な道が見えずに不安かもしれませんが、実社会にでた、総科生のフレキシビリティは、高く評価されています。自信を持って、頑張ってくださいね。

(担当 14生 筒井志歩)



▲整備途中の西2食堂前